

青い顔かけの勇士

鈴木三重吉

青空文庫

トウロツトのお家うちは貴族で、お父さまは海軍の士官ですが、今は遠方へ航海中で、トウロツトはお母ちやまや女中のジャンヌたちと一しよに、海岸の別荘でくらしてゐます。トウロツトにはイギリス人の或あるミスが、まいにち家庭教師にかよつて来て、町中や浜べへつれて出たりして、いろいろのことををしへてゐます。

「おぼつちやま、ミスがいらしつて、おまちなつていらつしやいますよ。」と、けさもジャンヌがよびに来ました。トウロツトは、つんぼのやうなふりをして、ぽかんと窓の外を見てゐました。

「これ、坊や。ジャンヌがよんでるのが聞えないの。」とお母ちやまがおつしやいました。「聞えたの。」と、トウロツトは、むじやきな目を上げてこたへました。

「だつてお母ちやま、わかつてゐるでせう？ ほら。ぼく、ミスと一しよに出かけるとあきくしてしまふの。」

すると、お母ちやまは、すこしけはしくまみげをしかめて、

「さあ、早くいつてらつしやい。おとなですな。ミスのお話をよくおぼえて来て、お午ひるのときにお母ちやまに話してちょうだいね。」

トウロツトは、いや／＼こつちへ来て、なさけななさうにジャンヌにもたれかゝりながら、小さな青服をきせてもらひました。それから頭をつき出して、リボンのついた帽子をかぶらせてもらひました。

「あゝあ、またミスのお話を聞かなげやならないのか。」とトウロツトはおもひました。お母ちやまはお話をすつかりおぼえて来るのだなんておどかしになりました。でも、それは、けつきよく、たゞおつしやるばかりだからだいじようぶです。これまでだつて、お午ひるのお食事のときには、お母ちやまは、いろんなほかのことを考へていらしつて、朝おつしやつたことはわすれていらつしやるのがおきまりです。

ミスは、すつかり身がためをしてゐます。がんこな顔色を、みどりいろの顔かけで、やはらげ、とてもおほきな両うでのとつききに、スコットランド出来できの日がさと、だい／＼いろの、かりとちのご本をつかんでゐます。ふしくれだつたそのからだは、ちようど、うすつぺらな石炭袋へ石炭をぎゆう／＼つめこんだやうなかつこうです。茶のサージ服の下には、ごつく／＼した骨ぐみが見えてゐます。たゞ服のまへの方だけが、くびのところから

足のあたりまで、すべつこく、まつすぐに見え、まつ平たひらになつてゐます。

ミスは、やせた手をつき出しました。トウロツトは、うでをのぼしてその手につかまりました。ミスはトウロツトの手の平をぎゆうとにぎつて、づしん／＼と足をふみながら、さきに立つて歩き出しました。トウロツトは、せい一ぱいに大またをひらいてついていきます。それは、まるで足長蜘蛛あしながぐもが小さなワラヂ虫をおともにつれて出かけるやうなかたちでした。

ミスは、れいのやうに、せんさくをはじめました。

「トウロツトさん。きのふはどんなわるいことをしました？ 一とうわるかつたとおもふことを言つてごらん下さい。」

トウロツトにはお話がこんなふうにはじまるのは、かなひませんでした。かういはれると、うるさい、いやなことをつかりおもひ出さなければなりません。しかし、いやでもおもひ出さなくてはすまされません。トウロツトはきのふは、いろ／＼わるいことをしました。

さあ、一とうわるかつたのは何でしたらう。お午ひるごはんのときにお皿せらいをひつくりかへしました。それから野菜をこぼしました。クリームを三どもおかはりをしました。それから、

ばあやが、どんな顔をして飲むかとおもつて、コーヒーの中へインキをちよつぱりおとしておきました。それからうつかり、小猫のこねこプスをお客間へしめこんでしまひました。

ばあやがどんなお顔をし、プスがどんなにこまつたかは、トウロツトはお母ちやまには話しませんでした。しかしお母ちやまは、みんな、ちやんとかんづいていらつしやいました。プスをしめこんだのは、むろんプスのしくじりからも来てゐますが、トウロツトにも多少罪がないとは言へません。

これなぞは、みんな、しかられてもいゝことです。だけど、トウロツトはまだもつとわるいことをしてゐます。さうく、あれが一とういけないことでした。きのふ、お母ちやまは、トウロツトの虫歯をうめに、齒のお医者のところへおつれになりました。

ところが、トウロツトはごうもん部屋のやうな、こはい手術室から、いやなにほひがふんと鼻に來ると、そして、お医者さんや、おほきなひぢかけいすや、はがねの道具や、車、ピンセット、やすりなぞ、さういふいろんなものを見ると、死にものぐるひで、こゞまりちゞみ、小さなロバのやうに、メーくなきはじめました。

お母ちやまは、ひどくこまつておしまひになり、ハンケチを出して、いすによりかゝつてお泣き出しになりました。それを見るとトウロツトは、すなほに手術いすに上りました。

でも、けつきよくはおなじことで、とてもこはくて、いやでたまらなくて、また泣き出しました。お母ちやまはどうくしかたなしに、お菓子屋へつれていつて、あまい、のみものを二はいと、お菓子を三つ、飲ませたり、食べさせたりして、やつとまたつれていらつしやいました。

トウロツトは、それだけをのこらずミスにお話しして、ぼくがわるかつたと言ひました。「あなたのきのふの罪は、すべてあなたの勇気がたりないからです。けふは、古代や近代の民族、とくにイギリス国民の歴史から例を引いて、勇気のお話をしませう。イギリス人はこの徳性をりつぱにそなへてゐます。その点では、いかなる国民も、イギリス人の足もとにもよりつけません。」

二

さあ、そろくむつかしくなりました。トウロツトは、きつと、こんなことになるだらうとはおもつてゐましたが、いよくとなると、うんざりしてたためいきをつきました。ま

いあさ、ミスに、前の日にしたわるいことを話すと、ミスはきつとすぐに、あなたにはこれ／＼の徳性がたりないと言つてくどく話し出すのがおきまりです。中でもイギリスの歴史から一とう多く例をひいて来ます。イギリスには、いろんな徳性が、どつさり、あふれてゐるものと見えます。ですから、トウロツトの頭の中にある英雄は、みんな、イギリスの兵たいのなりをしてゐます。

このまへトウロツトが、人の髪のを引つぱつたことをうちあけますと、ミスは友人といふものうつくしさををしへると言つて、アシルとパトロークルのお話をしました。

トウロツトには、どういふわけか、そのアシルとパトロークルのことをおもふと、いつでもイギリス人の曲馬団で、うたつたりをどつたりしてゐた黒ん坊の顔が目にかびました。ソクラテスだつて、トウロツトには、金ぶちの目がねをかけた、バラ色の顔をしたイギリスふうの老紳士のやうにしかおもはれず、聖ルイさへも、牧師のウエブスターさんのすがたをしてあらはれて来るのです。

しかし、一とう多くいろ／＼な役になつて出て来るのは、いつも或ある小さなお嬢ちゃんとお夫人の乗つてゐる、二頭だての馬車の御者台の上にある、あのイギリス人です。ふとつた、あぶらぎつた赤ら顔の男ですが、これはミスのお話できいた、フランソワ一世になつ

たり、アジャクスにもなりジュリアス・シーザーにもクロムウエルにもなるのですからき
たいです。

「トウロツトさん、聞いてゐますか？」

今、ミスはかう言ひながら、目を光らせてレオニダスが祖国をまもるために、三百人の
スパルタ人と一しよに戦死したお話をつゞけます。と、おもふと、こんどはホラチユース
・コクレスのお話です。これは、目つかちの勇士で、たつた一人で敵の全軍をひきうけて、
一つの橋を防ぎまもつたのですから、レオニダスよりもすばらしいわけです。ミスはその
話でもつてすつかり逆せ^{のぼ}上つて、トウロツトの手をぐんぐんひつぱつて歩きます。

と、そのうちにミスはふと立ちどまりました。ムシユウス・スケボラは、ぼうぎやくな
王を殺さなかつたのを悔いて、じぶん^にに刑罰を加へるために、手を火の中につつこんで焼
きました。ミスはその話をしながら、片手をにゆつとまへにつき出しました。トウロツト
はそのいきほひのすごいのを見て、これは、ミスもスケボラのやうに、じぶんで手をやい
たことがあるのぢやないかとおもひました。しかし、ぎんねんなことには、ミスの手には
手袋がはまつてゐるので、手の先がやけおちてゐるかどうか、それが見えませぬ。

あゝア、やつとイギリスの歴史になつて来ました。

聖地パレスティーンで、サラセン人をほろぼしつくしたのはリシャールです。ミスの日がさはサラセン人をきりたふし、よろひへうちこみ、または、そのときのリシャールの王家の旗じるしのやうに空中にゆらめきました。

トウロツトはミスがよろひを着て、騎士のやうに馬にまたがつて、やばん人にせめかゝる、いさましいすがたをかながへました。ミスには、たぶん、よろひなぞはいらないでせう。あんなに、からだがかたいのですもの。この人にあたれば、どんな矢だつてみんなをれてしまふでせう。これではサラセン人も気のどくです。

ミスは一しようにけんめいに話しつゞけます。

「近代では、かういふ崇高な功績といふものはきはめて少くなりました。つまり、イギリス人の英雄的な行為を必要とする出来ごとが、永年来、なくてすんで来たからです。近いれいとしてはネルソンを上げませう。ネルソンはトラファルガーの海戦には、片手をもぎとられても、なほ艦隊運動の命令を下しつゞけ、命をなげ出して指揮をしました。それから、つぎにお話ししなければならぬのは……」

ちようどそのとき、小間物屋のまへに来ました。ミスは買ひものがありました。トウロツトは、ちきそばの散歩道のとこまで歩いていきました。そのとこでまつてみようと思

つたからです。ミスは店の中へはいりました。トウロツトは、こちらへはなれてしまひました。

トウロツトは、けふはいろんな英雄のお話を聞きすぎました。レオニダス、ネルソン、スケボラ、コクレス、リシャール、これだけの人が頭の中でをどりまはります。トウロツトは、両うでをふり齒をむき出して、散歩道をいつたり来たりしてゐました。しかしトウロツトのうでは、ミスの方のやうに大きくもなく、黄色くもないのでいせいがありません。

ミスといふ人は、あんなにありつたけの徳性の話をしつてゐるのですから、じぶんでも、よほど徳性をどつさりもつてゐるにそうゐりません。トウロツトはミスがあまりすぎではありませんが、でも、えらい人だとは十分おもつてゐます。

トウロツトは、とても三百人の人を……三百人を殺すのだつたかしら……三百人はとても一人では殺せさうもありません。じぶんでじぶんの手をランプで焼くつてことも出来ません。一ど、ろうそくでやけどをして泣いたくらゐですもの。ミスは、さつき、スケボラのやうに……何とかスケボラだつたつけ……あゝ、ムシユウス・スケボラだ。そのスケボラのやうにうでをつき出しました。でも、あひにくそばにランプがありません。もしラン

プがあつたら、ミスは手をやいたにちがひありません。あんなかさくの手だから、をしげもなく焼いたにきまつてゐます。

ミスがネルソンになつたら、どんなにすばらしい、はたらきをしたでせう。トゥロツトはミスが襟えりのたかい海軍服を着て、ばかに長い片うでをぶら下げて、キイ／＼声で号令をかけるすがたをおもひうかべて見ました。

ミスは、そのつぎには、レオニダス、コクレス、スケボラ、それからもう一ぺんネルソンのすがたになつてあらはれました。そのほかの人たちは、みんなで一つのすがたになつて浮びました。そのすがたといふのは……

おや、どうしたんでせう。ミスは？ あら、何をふざけるのでせう。ほう、とんだり、はねたりきちがひむすめ狂人娘のやうに、くる／＼まはりをしたりしてゐます。ミスがあんなことをするのは、はじめてです。

おゝ、ちらりとうしろへ目を向けました。おや、くるりと向きかはつて日がさをふりまはし、をかしの声でさげびながら、あとしざりをしはじめました。

どうしたんでせう。トゥロツトは、しんぱいでたまらなくなりました。

三

あゝ、やつとわかつた。パン屋のちんはいやな犬です。あいつは、だれにでも、ウゝノ
うなつてとびかゝります。どうしたわけか、イギリス人の女をひどくきらふやうです。

そのちんが、今、うなりたけつて、ミスにとびかゝつてゐるのでした。うしろへひきさ
がつたかとおもふと、なほひどくうなつてとびつき、あと足で立ち上り、つきには地びた
へうづくまつて、きみわるく齒をむき出しました。はゝあ、あの犬をぢやらしたのは、き
つと、ミスのふくらはぎです。ミスの靴下です。をかしな犬もゐたものだ。あの犬が、骨
をしやぶつてゐるのを、よく見かけました。

ほう、だんくにはげしくつつかゝつて来ます。イギリスの女を食べてしまはうと、腹
をきめたのでせう。ミスの頬ほほはまつ青さをになりました。たゞ鼻だけが、危険におちいつた船
の信号燈のやうに赤くもえたつてゐます。ちんはぐんぐそばへ来て、狂つたやうに、ミ
スのぐるりをかけまはります。それこそ、日がさでおどかしても、やさしい言葉をかけて
も、きゝはしません。だいたんにも鼻先で、ミスのスカートをひつかきます。

がつしりしたちんの齒は、ミスのすねの骨ぐみへ、くひつきかけました。ミスはふだんから、わけもなく犬がこはくてたまらない人です。ミスは、今はもう、こめかみをかく／＼させ、全身につめたいふるへを走らせました。冷汗ひやあせがかさ／＼の背中へじつとりとたまりました。もう、泣かんばかりの顔をして、たすけをさげぼうとしてゐます。でもたつた一つ、ミスがイギリス人であるといふ誇りから、なきごゑを出すわけにもいきません。戸口に立つて、うす笑ひをかくしてゐたパン屋の店のものは、どつとふき出しました。

攻撃は、いよ／＼もうれつになりました。ちんのいとときり齒は、ミスのふくらはぎともふあたりへ、がくりとかみつきました。ミスは自尊心を失つて、ひどくあわてさわぎました。スカートをまくし上げて、ラクダのかけ足のやうに、くびのところまですねをはね上げました。でもちんは、もつとすばしつこくミスのイギリス製の、じょうぶなスカートをくはへました。ですからミスはとび上ることが出来ません。おやといふやうにふりむいたなり、ちようど、かつゑた野獣のきばの下でふう／＼息をしてゐる羊のやうに、にらまれながら立ちすくみました。パン屋の人たちは店の入口で腹をかゝへて笑ひました。

と、犬は、きふに足の間にしつぽをはさみ、耳をたれて、一本の足を空へはね上げてキヤン／＼なきながらにげ出しました。トウロツトが、ふざけがあんまり永すぎるとおもつ

て、もつてゐたおもちやのシャベルで、犬の背中を力一ぱい、ごつんとくらはせたからでした。

敵のかけは見えなくなりました。ミスはイギリス人らしい威厳と冷やかさとをとりもどして、トウロツトの手をとりました。ミスの血が静脈の中でめぐりはじめました。トウロツトは言ひました。

「ミスはずるぶん勇敢ね。ねえ、ミス。」

ミスは、さう言はれて、トウロツトの顔を、けはしい目をしてねめつけました。わたしのことをばかにしていふのだらうか。いや、さうではないらしい。トウロツトの、きよらかに、すんだ、二つの目には、皮肉なぞはちつともうかんではゐません。ミスは、おもはずからだをこゝめて、トウロツトに頬ずりをしました。

トウロツトは、ほかのことをかんがへてゐたので、ミスが、なぜだしぬけに、頬ずりなにかしたのかといふことを、あまり気にもとめませんでした。

食事のときにお母ちやまがおきゝになりました。

「けさはおもしろかつたの？ トウロツト。」

トウロツトはいさみ立つてこたへました。

「ね、お母ちやま、ミスはとても勇敢よ。お母ちやまに見せたかつたよ。そしてね、それからね、あのセル……セルブラスのお話をしてくれたの。ね、あの剛……剛勇？ 剛勇なサラセン人はスパルタ人なの。そしてじぶんはランプで片手をやかれたの。でも、片手でもつて橋の上に立つて、艦隊の命令をしたの。そしてね……それからね、あのね……。」

お母ちやまは、そんなお話はおすきでないらしく、

「へえ、えらいのね。さあ、トウロツト、スープをおあがり。」とおつしやいました。

ですからトウロツトはスープを食べました。トウロツトの目のまへには、みどり色の顔かけをかけ、茶のサージ服を着た、ミスの勇敢な立像がうかんでゐます。トウロツトは、その像をまじくと見すゑながら、スープをすゝりました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第五巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1929（昭和4）年1月

入力：tatsuki

校正：林 幸雄

2007年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い顔かけの勇士

鈴木三重吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>